2013 年 9 月 30 日発行
セブンスデーアドベンチスト石川教会付属　石川三育保育園

オーストリアの医師アルフレッド・アドラーは、自ら創始したアドラー心理学の中で、「子育てにとって最も重要な要素は、『勇気づけ』である」としています。アドラーは、次のように『勇気づけ』を子供たちに実践していました。

アドラー先生が子どもと絵を描いていて、その子が「僕、うまく描けないんだ。なんでもぐちゃぐちゃにしちゃうんだ」と言うと、先生は、「ここに四角い紙があるよね。一本だけ線を引けるかな？」と、その子に聞くのです。するとその子は、一本線を引きました。そこで先生は、「じゃ、続けてもう一本書けるかな？」と聞き、その子は先生に言われる通りにしました。一歩一歩子どもは、何かをするように勇気づけられ、学んでいきました。先生の子どもに対する辛抱強さは、誰にも真似できないものでした。例えば、恐怖症のため一人で暗い部屋に入るのを嫌がる子供に対して先生は、「二歩だけ進めるかな？」と言うのです。そうすると、子どもは一歩だけ進むのです。そこで先生は、「二歩進めるかな。そしてドアを開けて中を覗けるかな？」と言うと、子どもは、「ついでに中に入ってみよう」と思うのです。

アドラーは、子どもたちに、もっと勇気を与えることで、困難は克服出来ない障害ではなく、それに立ち向かい乗り越えることができることを教えていたのです。アドラーがいう「勇気づけ」は、子どもの中から勇気が湧き出てくるように働きかけることを意味しているようです。

そして、アドラーは、「勇気づけ」から生じてくる勇気は、自己信頼の具体的な表れであり、自分自身の能力を堅く信じることから生まれると教えているのです。ここでいう、自己信頼や自己受容は、おごり高ぶることでも自惚れることでもないようです。そうではなく、自分の欠点や弱さを認めながらも、自尊心を失わないということです。

自分の欠点や弱さを認める人は、他の人の欠点や弱さを理解し受け入れることができる人です。ですから、「勇気づけ」から生じてくる勇気は、他の人に協力的に共感的に働くというわけです。

この点において、聖書も「喜んで自分の弱さを誇ろう。だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。」（Ⅱコリント 12：9、10）と助言しています。

自分の弱さを認め受け入れた時、本当の強さ（勇気）が生じてくるのですね。本当の強さは、弱さを持った人たちを愛するのです。

石川三育保育園　園長　糸数正義

「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる。」

ピリピ人への手紙 4：13